

# 下山逸蒼と『層雲』再考

桑井輝子

## 問題の提起

下山逸蒼に関して、これまで筆者は、逸蒼の5つの句集、『逸蒼句稿』(1914年)、『下山英太郎句集』(1917年)、『句集砂漠の旅より』(1922年)、『霧笛』(1925年)、『第五句集 海隔て』(1935年)や彼の弟四郎宛書簡などについて、限定的ながら論考してきた<sup>1</sup>。本稿では、逸蒼と『層雲』との関係を、『層雲』の紙面をもとに考察する。逸蒼は『層雲』では途中から英太郎と本名を名乗るようになる。アメリカでの活動は依然として逸蒼を使い続けているが、本稿では、『層雲』での記載に従って、英太郎および逸蒼を使っている。

逸蒼と『層雲』およびその主宰者である荻原井泉水との関係は深い。逸蒼は『層雲』創刊と同時に積極的に参加したと言われている<sup>2</sup>。そして井泉水は、逸蒼の友人等の求めに応じ、逸蒼の墓碑の石材を調達し、碑文の句を選び、自ら筆をとっている。

上田都史『近代俳句列伝第三巻』(1987年)には、

---

1 「在米日本人『移民地文芸』覚書(3)『かへらぬふるさと』—下山逸蒼の自由律俳句」『白百合女子大学言語・文学センター言語・文学研究論集』7号(2007年3月)53-63頁。「資料紹介『下山逸蒼資料について』」『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』6(2012年3月)49-65。「『アメリカ文学』のなかの日本人移民文芸」田村一男監修『英米文学の地平』(金星堂、2012年3月179-197頁。

2 筆者自身もそのように考え、記述してきた。

アメリカ俳壇にも子規没後、燎原の火のごとく全国を風靡した新傾向俳句が入り、英太郎も早ばやとく並木折を調べて来て昼餉鶯に>などの句を作ったが、明治四十四年、荻原井泉水が「層雲」を創刊すると同時に、井泉水の俳句に対する革新澁刺たる熱意に感動、同人として参加した（上田143）。

と述べられている。さらに上田は、逸蒼の句が「晦渋な新傾向から流麗な自由律俳句へ」変容したのは、井泉水の指導によるものだと論じている（上田144）。

「アメリカ俳壇」と呼べるような活動母体があったのかどうかについては議論の余地があろう。上田は「下山英太郎」の項の出典を明記していないが、その内容から、小林不未鳴『下山逸蒼の生涯と其の芸術』（1954年）に依拠している、と判断できる。小林は、逸蒼の句は、「旧派から新俳句へ、新俳句より新傾向俳句へと発展し」、1911年に「自由律に三転」したと述べ、その理由を、「明治四十四年に『層雲』入門を機として、一大飛躍をしたと見てよいだろう」と結論づけている（小林22）。

小林は、1911年に出された『逸蒼句稿』の句と、その後を比較して、1910年と11年のあいだで句風が激変したのは、『層雲』への参加によるものだと結論づけている。そして、小林は、『層雲』参加年について、『層雲句集 第十の牛』の「逸蒼略歴」に、「『層雲』創刊と同時に同人となる」と記されている、と言及している（小林22）。

さらに小林は、「『層雲』の大久保彦左衛門と言われた」谷尾寿彦による「日本よりアメリカの『層雲』誌友に寄す」（『日米』新聞1932年4月12日）の記事を紹介して、「数多い作家の中でも裸木なく放哉なき後の沈滞した『層雲』の中で、逸蒼唯一人光芒を放っていたと見てよいであろう」（小林125）と論じ、

大正十五年からの「層雲」一筋への俳諧精進は、昭和四、五年を境として荻原井泉水氏の徹底的な指導により、俳句に一隻眼を開き、それ以後「層雲」を背負って立つ代表的作家の一として、裸木、放哉なき後、その自由、放胆、こまやかな人間味のある若々しい句風を以て「逸蒼時代」とでもいうべき一時代を画した事は、自由律俳句史上のみならず日本俳句史上その名と共に永久に消え去る事はないであろう（小林126）。

と、逸蒼の『層雲』における地位が極めて高かった、と論じている。

ところが、小林は、下山家に所蔵されていた逸蒼の書簡等は精読したようであるが、『層雲』に関しては、通読したようには思えない。事実、「創刊当時の『層雲』雑誌は手もとにはなく」と認めている（小林23）。

本稿は、『層雲』誌上で逸蒼がいかなる立場であったのか、1911年の創刊から没後の1935年までを通覧して、小林の論考を検証したものである。

## 逸蒼の登場

逸蒼の句が『層雲』にはじめて登場するのは1913年3月号であった。この月、

大救人にこの活計落葉宿朗ら（74）

1句が井泉水に選ばれている。

『層雲』の創刊が1911年4月であるから、アメリカと日本との郵送に要する時間を差し引いても、1年半以上の空白期間がある。創刊号を見た逸蒼が、すぐに投句しても稚拙で井泉水の選に値しなかったとも考えられる。あるいは、『層雲句集 第十の牛』の記述を小林が誤読したとも考えられる。少なくとも『層雲』の紙面から判断する限り、逸蒼が『層雲』に登場するのは1913年からである。

『層雲』の紙面から見ると、逸蒼の句は3月号に選ばれ、4月号には見開き2頁16句が掲載された。見開き2頁16句が新人に割り当てられるのは破格の扱いであろう。「参坡<sup>3</sup>行」と題して、「一月一日、早朝、サンタフキ停車場<sup>4</sup>」出発から、「リヴァーサイド」、「コールドトン」を経て、サンバナディーノで下車、「矢の根山中温泉」までドライブし、サンバナディーノで一泊、パサディナに行き、帰宅するまで「吟行」の句である。

さらに、9月号には「船卸し」と題して、「太平洋号の進水式に招かれ、羅府より羅港に向かふ」情景が同じく見開き2頁に18句が、12月号には、「虫聞きに」という題で、「在米逸蒼」の11句が1頁半に、掲載されている。さらに、翌1914年11月号には、「オレンジ咲く里へ」で10句が1頁余に、翌年3月号にも「北米の野より」で13句が1頁に掲載されている。この他にも、逸蒼の句は、『層雲』の「草上句稿」などにも散見できる。投句し続けても、1年以上選ばれなかった作者の句が、ある月を境に、常連になり、見開き頁を与えられる程の待遇を得られるのだろうか。逸蒼の作品の優劣を筆者が論じることはできないが、多くの紙面を割り当てられた彼の作品群の標題および内容は、極めてアメリカ的であり、『層雲』に国際色を添えるという意味で、特別に評価されたと考えられる。国際色という異色さがあったからこそ破格の待遇を得たとすれば、逸蒼の句は、投句と同時に採句されたと考える方が妥当といえる。

なお、『層雲』には海外からの句会便りも掲載されている。逸蒼の「参坡行」が掲載された4月号に、アメリカから「六雨会（米国加州王府ハリソン街）」の4句が、翌5月号には、「風土会（米国ポートランド市）」の1句、「サウス会（布哇ホノルル市）」の3句、1914年1月号「オリブ吟

3 同頁に「参坡市」を「サンバーナデイノ」とルビを振っている。San Bernadinoを日本人移民はこのように漢字で当て字をしていたのであろう。

4 ロサンゼルス近郊の駅、サンディエゴのサンタフェ駅やアリゾナのサンタフェではない。

社（米国加州ロア [ママ] ンゼルス市）1句が掲載されている。逸蒼に関連していえば、3月号の「オリブ社（北米、ロスアンゼル [ママ] 市フーパー街）」では逸蒼も名を連ねている。4月号には、逸蒼が「逸蒼句稿」を寄贈したとある。そして、1915年4月号には、「紙燭会（米国加州アップランド）」の、逸蒼、三斜、一風、咲女、行人の5句が掲載されたのを皮切りに、11月号を除き、翌1916年1月号まで続く。1916年3月号には紙燭会が改名したレモン詩社が登場する。これらの句会記録にみられる他の作家の採用句数と比較すると、逸蒼の採録句数は群を抜いている。

同時期に発行された荻原井泉水選『層雲句集 第一句集 自然の扉』（東雲堂1914年）には逸蒼の句はなく、『層雲句集 第二 生命の木』（層雲社1917年）には、下山逸蒼の4句

霧に悲しく心とけ二人添ひ行けり  
月の光さぐり飲む火酒の味ひ  
雲れんれんと別れしが二つとも消えたり  
鐘鳴る光に塔離れ舞ふ鳩らなり（葬式）(88)

が選ばれている。第一句集にはなく、第二に選句されていることから、逸蒼の参加は1913年と考える方が無難であろう。付言すると、同じ「米国」からは木村三斜3句も採用されている。

## 英太郎として

その後数年間、逸蒼の名は『層雲』から消える。1920年に発行された『層雲句集 第三 光明三昧』にも、逸蒼の名は見えない。再び『層雲』に登場するのは、1920年12月号であるが、このときには「(足なへとなりて) 下山英太郎」と記載され、

松葉杖に寄り仰ぎ見る星空はひろし  
夜霧に立ち濡るる我が外套の長さぞ  
深夜の灯ともせば松葉杖よ影つくる  
行手ただまんまんと黒き潮の香  
はるかの灯の灯の珠をつらぬる我が涙

の5句が選ばれている。

弟四郎に宛てた1917年3月19日付け書簡<sup>5</sup>によれば、英太郎は1916年7月、これまでレモン詩社の拠点として活動してきたカリフォルニア州アップランドを去り、アリゾナ州へ放浪の旅に出た。手紙は書かない。自分の消息は『射手』詩社の俳句でわかるはずなので、それを読んで欲しい、と書き送っている。現在この『射手』の所在<sup>6</sup>がつかめないので、この間の彼がどのような俳句を「消息」として詠んでいたのかは不明である。『層雲第四句集 風景心経』（1922）には、発病後の

吾に離れぬ松葉杖の夜の影ながく  
野芥子よこの野のレールの中に咲かむとす  
遠山うす青う消えのこる愁ひぞ（196）

3句が掲載されている。

翌1921年1月号には4句、2月号は9句、3月号7句と、目次に名前が掲載される別格の扱いになっている。「習作」欄が設けられると、毎号7、8句が掲載される常連であった。一貫して、下山英太郎名であり、逸蒼の

---

5 下山家文書に関しては、拙稿、「資料紹介『下山逸蒼資料について』」『JICA横浜海外移住資料館研究紀要』6

6 近代文学館に1916年7月の所在が判明しているだけである。

名前は使用されていない。

彼が下山英太郎と名乗るようになったのは、一つには、休止期に起こった恋愛事件と発病を乗り越えるために心機一転したいという想いがあったからかもしれない。しかし、同時に、彼が『層雲』から遠ざかっていた時期に、下山一水という俳人が登場したことに起因するのかもしれない。

このころ、1921年3月5日付け弟四郎宛書簡で、英太郎は、荻原井泉水および『層雲』との関係に言及している。彼はサンフランシスコの二大新聞『日米』、『新世界』に発表したなかから自信作を選び、「純芸術俳句専門の雑誌」である『層雲』に送っている。「その大将は井泉水といつてギロンこそすぐれてゐるが句としてはわしから見てどうもあきたらない」と批判している。そして、句を勝手に手直しすることに不満を述べ、「あまりありがたくもないがなんぞ日本の俳句の檜舞台と聯絡のないもの淋しいからやつてゐるのだまことは是からのわしの句は区々たる句作者に示すにあらずして真に神に捧ぐる詩として作るのだから」、井泉水の評価は問題ではないのだ、と述べている。しかし、それは必ずしも真意ではないのであろう。投稿を続け、やがて後述するように「社友」になるということが、彼の『層雲』へのこだわりを示している。

『層雲』は1922年2月号で「層雲社組織改造」を宣言する。それまでは井泉水個人による発行であったものを、「社友財団組織」として経営を行うこととし、さらに「層雲社」の建設を企画し、基金の募集を行った。そして「層雲社要規並に社友清規」を定めた。基金寄付者に英太郎の名がでるのは1922年12月号、「一口 米国 下山英太郎」である。一口は10円であるが、『新世界』新聞の校正係を務めながらも闘病生活を送る英太郎にとっては、相当な出費であったはずである。金額をどのように捻出したかはさておき、ここで英太郎は「社友」となったわけである。1925年に刊行された『層雲第五句集 泉を掘る』では、英太郎の句は、3頁24句

が採録されている。

『層雲』の1925年12月号は、「社友、下山英太郎君」の「家集」『霧笛』について「全句数四百五十許りに君の異郷に於ける生活が滲み出している」句集であると「新刊紹介」で取り上げている。そして「君の近来の作は毎月欠かさず本誌で発表されてゐる」ので、発病当時の様子を示す3句が転載されている。入手先まで記載されており、好意的な紹介であるといえる。1925年秋に下山逸蒼の勧めでサンフランシスコに『層雲』支社が設けられることになったという。誌友は他に3名あるという（杉野珠樹「サンフランシスコより」1925年11月号85）。

おそらくこの支社が「斧の会」であろう。1926年7月号には、北米「斧の会」が珠樹宅で開催された記事があり、逸蒼も参加している。8月号には、「斧の会」の通信として、

下山英太郎、号を逸蒼と言ふ。紅頬童顔なり。句道を修むること並に二十有余星霜、尚その半生を此道の修行に当てんとす、彼の句会に出席するや必ず人に先んずるも、曾て、句会を發起することなし。然るに這般切りに句会を提言す、同人これを未曾有となし欣びて会する人数その前例を見ず（87）。

とある。逸蒼が「斧の会」という句会を珍しく發起したというのであるから、これが逸蒼の提唱した支社なのであろう。

ただし、この会のその後については、『層雲』には消息はない。代わって通信欄に見られるのは、「湖畔社（北米、サンフランシスコ）」である。2月、3月の句会の抄録が、1931年6月号に掲載されている。この会では逸蒼は、英太郎ではなく、逸蒼で句を載せている。アメリカでは逸蒼の号を使用し続けたことを物語っている。この社の設立について、英太郎は、



1931年1月に、片井溪巖子、佐藤青稲と連れだって、オークランドの求道舎の波多野泰巖を訪れ、「純層雲派」の俳句会を発足させることになり、名称を、近くのメリット湖にちなんで、湖畔社と名付け、毎月最終土曜日に句会を開くことにした、と報じている。いずれは層雲支部にするつもりだという。「ここに集るものは大抵澆刺たる青年でつひ私も愉快でたまらず、例会の都度海を越えては通ひつづけてをります」と通信している<sup>7</sup>。層雲社理事の小澤武二選による湖畔社の1932年8月例会の記録には、17名17句が載せられている。

1930年に入ると、『層雲』に選ばれる英太郎の句は少なくなる。5月号から2句（8月号、12月号は1句のみ）採録されているだけである。1931年になると、1句のみ採録が多くなる。新しい投句規定により、井泉水選の雑吟は20句限りとあり、選も厳しくなっている<sup>8</sup>とはいえ、10句も選ばれる作家もおり、彼の心中は穏やかではなかったはずである。再び採録数が多くなるのは1932年1月号であり、8句、2月号には9句と増加する。とはいえ、『層雲第六句集 劫火の後』（1927年）10句、『層雲句集 第八 昭和の曲』（1931年）10句、『層雲句集 第九 一人一境』（1933年）でも9句、海外移住地からの採用としては、別格の扱いである。

1932年2月号には、「自然・靈魂・言葉—英太郎を憶ひながら—」と題して、青山郊汀が4頁にわたる随筆を寄せている。青山は、国立国会図書館図書目録をみると、1888年生まれ、グリム童話翻訳の他、現代詩も出している。3年前にドイツ留学から帰朝の途中、アメリカを経由し、サンフランシスコで、珠樹、春舟郎、紅人ら『層雲』のなかまとともに、英太郎に出迎えられた。そのときの、彼等が語り合った話を中心であるが、英太郎に関しては、「俳縁少くして句作の精進あるものを未だ聞かない」と

7 通信の日付は5月2日、10月号に掲載された。80

8 井泉水「雑記」1931年5月号74。

評している。言葉を換えると、「俳縁にめぐまれず、俳器に適せず、然も故国の魂を異郷の地に培ふべく俳水を掘りつつある」人物、要するに、俳句の天分がないのに、俳句の精神とはほど遠い世界で俳句を作り続けているような人物であるというのである。しかし、そうした人物の作品にこそ、「自然、靈魂、言葉の聖三一〔三位一体〕を表現するリズムの生ずる時」、「詩と俳句とが全く一つとなる時」があるという。俳句を連想させる特質がないにもかかわらず、これぞ俳句という作品が生まれるのだという(28-29)。

郊汀は、さらに続けて、

少年にして移民となり、彼此四十年をアメリカ西海岸に放浪し、肴屋となり、漁夫となり、百姓となり物売りとなり、現に日米新聞社<sup>9</sup>の校正係りとなり、病を得て老ひの身に松葉杖曳く人となりながら、何故か此老プロレタリアはプチブル的魂を棄てないのだ。そしてそれが彼の俳句である(29)

と論じ、彼の作品は、サンフランシスコの自然を知らなければ、味わい尽くせないとも評している。

郊汀は英太郎に関しては個人的にはあまり知らなかったのではないかとも思われる。英太郎の日常を伝えるのは、松野珠樹の「下山英太郎素描」(1932年10月号)である。そこには、逸蒼の句作の様子や、屈託のない人柄がよく描かれている。八百屋で店員がバナナを袋にいれている間に、ポケットから手帳を出して2句、支払いの時に1句、という具合に。そして、買って来たバナナを邦字新聞社の友人に手土産のように勧めておきながら、一休みすると、何事もなかったかのように、あっけにとられる友人を背に、

9 『北米朝日』新聞の誤り。

バナナを持ち帰ってしまう（76-77）。

しばらく消息を絶っていた湖畔社であるが、1933年3月号には、米国加州支部として、6月、7月、8月の例会、4月号には、9月、10月の例会で詠まれた句が掲載されている。1934年1月号には、支部の名称は消えているが、8月、9月例会、4月号に12月例会、6月号に11月、12月例会、7月号に1月、8月号に2月例会、選ばれている。

1934年12月号には「北米より」の通信として、英太郎の手紙が掲載されている。サンフランシスコの文芸協会が彼のために「慰めの会」を主催し、演芸などを見せて、収益金を英太郎に寄付、その資金で、三週間の予定で湯治に来ているという（9月14日付け、「ウイルバア、スプリングス」より84-85）。

## 死去と評価

1935年1月6日、下山英太郎は死去した。3月号には、彼を悼む記事が掲載されている。谷尾壽彦は、「松葉杖に泣く」で、英太郎の作品は「遠く異郷にある、不遇の旅人としての、淋しい放浪から来る一種の強い感傷に彩られてゐた」と評し、「彼はまことに層雲での、一人のジプシーであつたのだ」と形容している。この3頁の追悼文のなかで、谷尾は、英太郎に対して、「痛ましい」、「淋しい」、「悲しい」、「寂寥」、「侘びしい」という形容を繰り返えし、大陸を放浪する彼の孤独な望郷の叫びが自分の胸を打つと、感慨を述べている。そして、死去の報に接したとき、彼の通夜には湖畔社同人ら70名が集まり、遺体が解剖に供されなかったことに、アメリカの同人等に謝している（68-70）。

井泉水は、4頁にわたる「彼が最後の手記」で、英太郎の最後の『層雲』への投句を紹介し、さらに、松野珠樹が「北米」に寄せた葬儀の模様、湖畔社の波多泰巖が伝えた英太郎の死去数日前の12月26日から、死去の日

の1月6日までの句帖を、転記している（71-74）。

井泉水への最後の句稿は、

手の蟻も、別れの握手だ  
岩の凹みに溜まつてる水に映つた顔だ  
松葉杖のさきで月夜からおとしたフルーツ  
あすは此処を去らうを野鳩の遠ごえ

波多泰巖の書簡によると、英太郎が病状の悪化で北米朝日新聞社の校正係を辞した時の句は

仆れるまで頑張つて仕事をしたせめてもの満足  
死後の解剖まで決めた心のほほゑみ

友人等の世話になった頃の句は、

道づれと別れては、別れては行くしぐれ  
あらゆる苦煉に体当りに当つてる  
ひねれば死ぬる瓦斯装置見上げて秋の夜  
吹かれきてしばしただよひ吹かれゆくかの白雲に似たる我身か

明日手術と聞かされた12月26日には、11句、そのなかに

ならばマスイ剤のままとこしへに眠つてみたいが  
不自由よりも痛みに倦んじ苦みぬきし身が  
明朝はオペレーションときいた夜の両脚のケイレン

12月29日には、7句、その中に、

死は第一の願 つぎはなりゆきに  
病軀の痛みを齒を嚙みしめるに生まれてきたのか

1月5日には、

郡病院のベッドから新年の海かんじてる

これが辞世の句であった。さらに5日付けの日記には、7句が記されていた。

ナースウ [ママ] メーキベットするシーツへの旭  
きづかぬうちに苦しい楽しいつき日は流れる  
枕辺からさしてきた新春の陽をつかむ

6日、「脳貧血らしく目がぐらぐらした」という記述で日記は終わる。井泉水は、英太郎からの渡米の誘いを受けて10年、その約束を果たさず、渡米の時には墓前に花を供える他はないと記述を結んだ。

さらに井泉水は、「雑記」でも英太郎の死去を報じ、彼は「層雲第一期時代からの作家である」と述べ、その略歴を記し、「三十二年の長日月を沿岸に送つた間に、紙燭会、レモン詩社等を興して、北米日本人の間に新傾向、自由律俳句の弘布につとめた其の功績は不滅のものであらう」と称えている(81、強調筆者)。ここで井泉水は、「層雲第一期から」と記し、「創刊と同時」よりも時間的に幅のある表現を使っている。

1935年4月号には、1月27日にオークランド求道舎で開催された「北米

支社、湖畔社」の「逸蒼下山英太郎追悼句会」、6月号にはロサンゼルスで開かれた「下山英太郎追悼句会」の海外通信がある。続く7月号には湖畔社の「逸蒼七七忌墓参吟行句会」の、9月号には「逸蒼百日忌」の句が記載されている。なお湖畔社の句会は、11月号の7月例会まで、11年7月号では、オークランドの「ポピイ句会」に代わっている。投句者名が重なっているので、湖畔社は解散し、「ポピイ句会」になったとも推測される<sup>10</sup>。

下山英太郎死去後刊行された『層雲句集 第十 第十の牛』(1935)には、作家280、選句2086中、英太郎は14句が選ばれている。そして、物故者のなかでも英太郎に言及して、

下山英太郎は、私は逢つたことはないが、人を介して、私に外遊をすすめてくれ、私もいつかは太平洋の彼方で彼と握手する事のあることを信じてゐたが、遂に其機は永久になくなつてしまつた。「めいつた活字でまいりゆく同胞はげます」という彼の句は、移民法が米国下院を通過した折の、悲愴な日本人的立場と新聞社員としての職場からうまれた句で、忘れがたいものだ。彼は遂に異郷の土になつてしまつたが、いまでも、ローサンジェルス付近に自由律俳句のさかんなことであることこそ、彼の為の立派な記念碑であり、又、彼が建てたる我等の道の金字塔であるとも云へよう (331)。

と、アメリカで『層雲』同人の活動が活発なのは彼の功績だと称えている。物故者略歴に関しては、

---

10 「ポピイの会」は第二次大戦中も収容所内で活動し、同人らは1945年1月に「下山逸蒼忌 霧夜の独り居士」を行っている。『ユタ日報』1945年1月22日。

本名は英太郎。号逸蒼。明治十二年二月九日、盛岡市紺屋町に生る。三十六年十月、シヤトル上陸以来、三十二年の長日月を北米沿岸に送る。南加アツブランドに発生したるレモン詩社の前身たる紙燭会の同人として北米俳壇に活躍し、後自由律俳句の弘布に勉めて最期に至るまで句作を廢せず。層雲には初期よりの同人たり。晩年は病のために脚部の自由を喪ひ、松葉杖に頼りて、諸新聞社の校正等をなして糊口す。昭和十年一月六日、桑港病院に於て逝去す。友人葬として、サンマテオ日本人共同墓地に葬る。享年五十六。『海へだて』の他数冊の句集あり（332、強調筆者）。

この紹介文を読むと、傍点のように「初期よりの同人」と書かれているのであって、創刊と同時にないことが明瞭である。「初期」と「同時」とは異なる。小林の、逸蒼は『層雲』に一時代を築いたような重要人物だという思い込みが、小林に引証を誤らせたのであろう。後の研究者は、小林の綿密な調査、とくに逸蒼の書簡と、逸蒼の親族への聞き取りに基づいた精緻な記述から、『層雲』側の調査は不十分であるという小林の弱点を看過してしまった。

井泉水は、1937年6月2日大洋丸で横浜を出発、11日にハワイ着、滞在を延長し7月2日にハワイを出て、7日にサンフランシスコに到着、ロサンゼルス、メキシコにも足を延ばし、8月5日にサンフランシスコを発って、8月19日帰日した。ハワイに3週間、アメリカ本土に4週間の滞在であった。井泉水自身は、「海を越えて」と題して、1937年7月から11月号まで、21通信を寄せている。その13信で、井泉水は、英太郎の墓参のときの様子について伝えている。井泉水は、英太郎の墓石にハワイの木の実のレイをかけたとき、13年前、英太郎が青汀を通して井泉水の渡米を願った約束をようやく果たせたと、「大きな肩の荷が一つおりたやう

な気がした」と感慨を述べている。この間の『層雲』には、ハワイ、オーランド、ロサンゼルスでの歓迎句会に関する記事が多数掲載されている。

英太郎に関しては、さらに井上三喜夫が1937年4月号で「自由律俳句序論」で井泉水句集小論の項の後に、「孤独の魂に就いて」で論評している。英太郎は、「アメリカ三界に漂泊した俳人」と形容され、その作品では、「孤独の魂」が、「主観的」に表現されていると見なした。一般的な俳句が、客観的に、そして小さく表現することで自然に迫ろうとするのとは対象的に、「みぶりも、ことばも大きい」と指摘した。とはいえ、晩年の句には、客観的精神が感じられるようになり、「孤独の魂の好き」が句に現れていると評している。「暮れのこる山があつて夕餉の後のピアノ」という句には、「しづかさ、全く傍観的と言つていい、深い平凡に徹した姿」が見られ、「いままでは彼にとって魂であつた『我』が、より大きいものに被はれて、何か美しい情感が滲み出てゐたのではあるまいか」と観察し、こうしたときに、彼は「しみじみ救はれてゐたことだろう」と察している（36-38）。

## あとがき

『層雲』創刊号から1937年12月号まで、および『層雲句集』1から10まで、下山逸蒼／英太郎に関わる記載や句を通覧した。その結果、(1)逸蒼は『層雲』創刊当時から同人になったのではないこと、(2)彼の参加は2年後の1913年3月号からであること、(3)「社友」として掲載されるのは1922年12月号であること、(4)在外の作家としては破格の扱いを受けているとはいえ、決して「裸木、放哉なき後、その自由、放胆、こまやかな人間味のある若々しい句風を以て『逸蒼時代』とでもいうべき一時代を画した」とまでは評価されていなかったことが判明した。

しかし、逸蒼の内面には、境遇から想起されるような「痛ましい」「淋しい」「放浪者」とは言い切れない複雑さがある。「痛ましさ」のなかに力



強さが、「淋しい」心に友情の温もりが、「放浪者」の孤独に、独り者の自由さが、ない交ぜになっている。青山郊汀が指摘したように、彼の句を理解するには、在米日本人社会の土地と風俗を理解する必要がある。また、松尾珠樹が伝えたような、彼の磊落な性格も理解しなければならないだろう。その場、その場に、浮かんだ心境断片を詠み込む逸蒼の作句姿勢は、全体像を鳥瞰しつつ味わねばならない。とはいえ、日本人移民社会研究の学徒として、逸蒼の句は、特異ではあるが、移民社会の風俗と心情を断片化したものとして今後も探究したい。

注記) 本稿は、科学研究費助成事業基盤研究(C) 課題番号22510276およびJICA横浜海外移住資料館学術研究費「海外移住資料館所蔵文献資料の拡充と学術的活用の探究」による研究の一環である。

#### 引証文献

- 上田 都史『近代俳人列伝 第三卷』(永田書房 1987年)。  
小林不未鳴『下山逸蒼の生涯と其の芸術』(層雲社 1954年)。  
『層雲』創刊号~1937年12月号  
1914年『層雲第一句集 自然の扉』(東雲堂)  
1917年『層雲句集 第二句集 生命の木』(層雲社)  
1920年『層雲句集 第三 光明三昧』(層雲社)  
1922年『層雲第四句集 風景心経』(層雲社)  
1925年『層雲第五句集 泉を掘る』(層雲社)  
1927年『層雲第六句集 劫火の後』(層雲社)  
1929年『層雲第七句集 短律時代』(層雲社)  
1931年『層雲句集 第八 昭和の曲』(層雲社)  
1933年『層雲句集 第九 一人一境』(層雲社)  
1935年『層雲句集 第十 第十の牛』(層雲社)